

## 国語科模擬授業における自己評価力の形成

——自分の言葉で授業を語らせるための試み——

滝 浪 常 雄

### Developing Self-Evaluation Skills in Trial Lesson Practices of Japanese Language: An Attempt to Make Students Talk about a Lesson in their Own Words

Tsuneo TAKINAMI

#### 1. はじめに

今教育現場では、様々な問題渦の中にある。その中のひとつとして教師の指導力、とりわけ授業力が問われている。校内研修のほとんどが授業研究に費やされ、日々の研鑽によって授業力の向上が行われている。要するに、授業力は本来学校現場においてオン・ザ・ジョブ・トレーニングにおいて身に付けていくものであったといえる。しかし、近年教師の力量形成の準備段階として、教師を志願する者に教師の実践的指導力の基礎が求められている\*1。

また、採用段階においても、実践指導力の中の教科指導として「模擬授業」を試験科目に位置付けたり、面接の中で生徒指導的な内容や場面指導を課したりしている地域が多い\*2。これは教師の力量として、実践的な指導力が必須能力であると捉えているからである。したがって、教員養成段階において、実践的指導力の基礎を身に付けることは必修的な条件と言える。

さらに、文科省は「教職に関する科目」の趣旨の中で、「教育課程及び指導法に関する科目」として、教員養成科目の「教科教育法」において学習指導案の作成、教材研究、模擬授業を取り入れ、実践的な指導力の養成を目指した内容になっている\*3。加えて、教師の実践力の育成方策として平成25年度から、教員養成系大学4年次に「教職実践演習」を位置付けている。

本稿では実践的能力として、教科指導を取り上げていく。いわゆる模擬授業である。本学安田

\*1 平成9年7月教育職員養成審議回・第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」2-(3)「養成と初任者研究との関係」において「実践的指導力の基礎」教員を志願する者に修得させることが大学の責務であると述べている。「実践指導力の基礎」とは、教科指導、生徒指導等を著しい支障が生じることなく実践できる能力」と定義している。

\*2 卑近な例であるが、広島県・市の採用選考において、二次選考に模擬授業が課されている。広島周辺の隣県でも同様な傾向にある。

\*3 教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則「3 大学は、第一項に規定する各科目の開設に当たっては、各科目の内容の整合性及び連続性を確保するとともに、効果的な教育方法を確保するように努めなければならない。」とし、教職に関する科目の趣旨「教育課程及び指導法に関する科目：○各教科、道徳及び特別活動の指導法等に関する各科目については、学習指導要領に掲げる事項に即して包括的な内容を含むこととする。また、各教科等を、実際に指導する場面を想定して、学習指導案の作成や教材研究、模擬授業等を組み入れ、実践的な指導力を身に付けさせるような事項を、当該区分の授業科目の講義概要（シラバス）で示すこと。」と記されている。

女子大学では、「教科教育法」に加え、「教科教育法演習」をカリキュラムに位置付けており、その実践はかなり早くから取り組まれている。この演習では教材研究、学習指導案の作成、模擬授業を中心に実施している。つまり、授業実践力の育成を目指したものである。そこで学生が何を学んでいるのかを明らかにしながら、本授業のあり方を見つめる契機としたい。

## 2. 研究の目的

授業力とは、益地憲一編著「小学校国語科指導」によれば「授業を行う能力は零から授業を創り上げていくという意味で『授業構築力』と言い換えられるが、それは授業構想力、授業実践力、授業反省力に分けることができる。」としている\*4。授業構想力とは言い換えれば、教材研究力とすることができる。国語科においては教材の解釈が中心となってくるが、指導計画、指導方法を含めて教材研究がなされる。次に授業実践力とは、授業を展開する場合の能力である。そして、授業反省力とは、授業後段階の授業を評価する力である。

したがって、それぞれの段階における授業力をいかに育成していくかが教員養成の課題であると同時に、教育現場が求めている課題であるともいえるだろう。教員養成段階における授業力の育成は何をすべきであるのかを問うていかなければならない。学生にとって模擬授業を通した授業力育成において、何を育成していくことが重要であるか。明らかにしていく必要があると考えた。

そこで、授業構想力、授業実践力、授業反省力のうち、授業反省力に焦点を絞って研究を行っていくこととした。とりわけ、授業後段階の自分の授業を反省する力が問われている。「自分の授業で、自分の力で」分析し、評価し、次の授業展開に生かす力が求められる。とかく授業反省は一過的に捉えてきた感がある。そうではなく、自分の授業を自分の言葉で語るができる力が学校現場につながる授業力の核心となるのではないかと考えた。そこで、筆者は「授業反省力」を授業の「自己評価力」と位置づけていくこととする。

自分の授業を語るができることは、日々の授業実践を自分なりに省察し、次の授業づくりに生かせるということにつながる。校内研修の一環として授業反省が複数人数で行われる。互いに研鑽を積むということでは、意味があるものである。しかし、普段から、もっと言えば毎日のように複数の教師に自分の授業を見て、意見をもらえるわけではない。結局は、自分自身の力で授業を見つめ直すことが大切であり、そのことが、自分の授業力の向上につながることを考えていかなければならない。

本稿では、筆者が担当している「国語科教育法演習」の報告をする。学生の模擬授業の実践を通して、授業の自己分析、自己評価力育成のための方途を探るのが目的である。

## 3. 国語科教育法演習の概要

### 3.1 グループ分けと模擬授業の教材決定段階

おおよそ3名か4名のグルーピングを行う。出席番号順で機械的に設定している。メンバーは全員小学校教員を志す者である。彼女たちは常に意欲的な態度である。

\*4 益地憲一「第2章授業とは」、益地憲一編著『小学校国語科の指導』、建帛社、2000年、p12

教材の選択に関しては、「読むこと」の教材を選択するように指示している。これは「読むこと」の教材が教材研究、発問研究、指導技術等の授業力を、より発揮できると考えたからである。というのも他の2領域について過去に実践したことがあるが、導入場面に限られてしまうことと、児童役が表現活動させるために、事前に作業をさせておく必要があり、なおかつ作業場面が多くなることや個人差が大きいことにより学習展開が難しかった経緯がある。

以上、「読むこと」の教材選択に関しては、原則的に学生の自由選択に任せている。ただ教材の選択傾向としては、学生のほぼ9割が物語文を選択する。聞けば物語文は読んでいて楽しいし、授業にしやすいのではと考えているようである。したがって説明文教材の選択もできる限り促している。

### 3.2 授業づくり段階

この段階では学生は教材研究及び学習指導案の作成を行う。そしてリハーサルを繰り返し行い、授業に臨んでいる。学生は自分たちの担当日までに、教員と定期的に相談を行う時間を設け、それ以外にも積極的に相談に来ることを奨励している。これによって、自分たちの教材解釈や指導方法について深まると考えた。このことについては、授業アンケートでも、この相談によって自分たちの授業づくりに大変参考になったという感想が寄せられている。

### 3.3 授業展開段階

この段階は実際に模擬授業を行う段階である。通常授業者と児童役の学生がいれば十分であるが、客観的に観察するための役も設定している。この観察役は次時に模擬授業を行うグループに担当させている。第三者的な視点で授業を観察し、授業後の反省会で意見を述べるのが主である。付加的に計時や記録も委ねている。

模擬授業の進め方は、3名なり4名なりで45分間を分担し、リレー方式で実施している。これはできるだけ一人で教壇に立つという体験をさせるためである。時間の多寡はあるものの、学習活動ごとに分担している。

### 3.4 授業後の反省段階

授業後に授業者から一人ずつ自己反省を述べる。その後、児童役、観察役から質問、意見、感想を出していく。そして、後半、教師が指導講評を行うのが通例であるが、時に学生から提供された話題について司会進行しながら協議形式で話し合うこともある。そして、最後に「省察カード」に記述する。

そして、後日まとめとして、自分たちの授業の反省レポートを提出させている。

### 3.5 課題

以上、概要を述べた。授業アンケートによれば2.1～2.3の項目について言えば、授業評価を読む限り、概ね評価は4を超える高評価である。特に教材研究、学習指導案作成の段階から教師が相談に乗ることは学生にとって安心感があり、教材解釈や指導方法、指導技術、児童の実態把握など、最も授業を通して学ぶ面が多いようである。

一方で、反省会では、緊張していたことや児童との応答の難しさに終始することが多く、なかなか自分なりに反省を行うことが難しいようであった。そして、前述のように後日レポートを課

している。ここでは内容的には授業終了直後とは違って、時間を経過しているだけによく省察されていると思うが、文章にまとめてしまうあまり、細かい省察には至っていない。授業直後の反省は時間的な制約もあるが、自分なりの言葉で、授業反省を語らせることに課題を感じた。

そこで、今回は日が経過していても、自分なりの言葉で語らせるための授業リフレクションの方法として、「カード構造化法」を試みることにした。

## 4. 授業リフレクションの考え方と方法

### 4.1 授業リフレクション

自己評価の方法としては、授業リフレクションという考え方を取り入れることとした\*5。「リフレクション」とは「反省」「省察」という意味がある。授業を教師と児童の相互性の場として、あるがままに引き受けるという授業観を基盤としている。そして、自分の授業であるという存在意識を抱き、自分の授業を対象化して評価する力が、これからの教師にとって必要であると考えた。これが授業リフレクションの基本的な考え方である\*6。

ただ授業は授業者自身が授業の系の中に入っているために、対象化する難しさも一方で考えられる。そこで、自分の授業を自分で見られるようにする方法が必要になってくる。

授業リフレクションにはいくつかの方法が考えられているが、今回はカード構造化法を取り入れることとした。さらに学生の反省レポートを課しているので、これと比較して、学生の自己評価を質的に分析していく。

### 4.2 カード構造化法

目黒悟氏は「鏡としてのリフレクション」の機能を提示し、何かに反射させて自分の授業を見るツールが必要であるという。そこで、考案された方法がカードによる授業分析である\*7。

手順としては、まず印象カード（以下カードとは「印象カード」のこと）に授業で印象に残ったこと（感じたこと、考えたこと、気づいたこと）を書く。これは授業者のアウェアネスを信頼した考え方を授業リフレクションでは大切にしているからである。従来の授業反省が、反省会で他者から気づかされるということに終始しがちであったのに対して、そもそも自分の授業において授業者自身での授業の「実感」こそが大切であるというものである。授業者自らの気づきこそが自分の授業の再構築に欠かせないと考えることが、このカードの意味である。

次にこのカードを二分法で仕分けしていく。そのたびに見出し語を付けて、これ以上分けられなくなるまで作業を行う。そして、ツリー図を完成させる。

そして、ツリー図完成後、授業者はプロンプターという第三者によって、自分の授業を考察するのである。プロンプターとは「語りの促進者」と呼ぶ聞き手である。基本的には授業者の語りを支援するので、プロンプターが解釈をする必要はない。というより、してはならないとしている。あくまでも授業者の自分語りが必要であり、自分の語りの中で、自分が気づいていくという

\*5 藤沢市教育文化センター『教えることをとおして自分も育つ』2012年3月。本書は故藤岡完治氏が中心となって、2002年に教育実践臨床研究部会の紀要として毎年発行されている。カード構造化法について過去にも紹介されているが、今回は本書に拠るところが多い。

\*6 目黒 悟「第1章授業リフレクションの基本的な考え方」同掲書、pp19-29参照。

\*7 目黒 悟、山中伸一「第2章カード構造化法の手順 改訂版」同掲書、pp31-43参照。

自己分析した考察がとらえることになる。

したがって初心者にはプロンプターの存在はある意味で。まだ自分で語ることが不十分であるし、ツリー図を作成してもそれをどう整理して考察していくかが不十分であるからだ。熟達してくればプロンプターは本当に心地よい聞き手の役割を果たしていくことになるのである。

以上がカード構造化法の基本的な考え方である。

### 4.3 授業反省レポート

学生に課す反省レポートについては、授業の自己評価は各自で行わせている。これは複数で授業を行っても、将来的に授業は原則個人で行うものであり、最終的には個人に反省を落ちなければ意味がないと考えるからである。今回の試みでは、カード構造化法を行った上で、反省レポートを書かせているので、どのように考察にまとめているかを参照して学生の自己評価力の指標としたい。

反省レポートの項目は以下の通りである。「①日時②自分たちの授業についての考察③改善点④自己評価⑤演習全体の感想」である。特に③改善点は、この授業リフレクションの目的が授業の考察であるが、次につながる考察でなければならない。つまりフィードバックではなく、フィードフォワードな情報（FF情報）を生み出すことが重要であると考え、どう自分たちの授業を分析、考察して次回の展開を構想したかを把握するためである。

## 5. カード構造化法による授業分析

### 5.1 カード構造化法による授業分析

#### (1) 導入部分を担当したA子の授業分析\*8

A子は担当した部分の授業を一言「ぱっとしない授業」と評した。これが彼女の印象的な授業観である。そして、自分が担当した授業の部分について、その印象を8枚のカードに書いた。以下に示した内容である。

①机間巡視で発表してもらいたい子がいたが、手をあげず、他の子がけっこう手をあげていたので困った。	②出してほしい意見が出なかったとき、板書に困った。	③板書のスピードが遅く、子供が指示を待つ状態が長くなった。	④発表をしてもらった意見をどのようにまとめたらいいか迷って、板書を消してしまった。
⑤声の大きさ、使い方（強弱とか）がもっとうまくできたらよかった。	⑥発問が多くて教科書学習に近くなってしまった。	⑦子どもの発表する場面が多かったが、その分書く量も多かった。	⑧授業が始まって笑顔でこっちを見てくれて嬉しかった。

\*8 本授業は3名で行われたが、紙幅の関係でA子の実践のみ記す。



これら8枚を二分法で分けていく。①から⑥までが「教師」という見出し、⑦⑧が「児童の様子」という見出しに分けられた。そして、①から④までが「板書」、⑤⑥が「発問」。「板書」がさらに①机間巡視と②から④「まとめる力」、また「発問」が⑤「ことば」と⑥「教科書」に細分された。

一方「児童の様子」は⑦「机間巡視」と⑧「授業態度」に分けて終了した。これらの見出し言葉がA子の考察、いわゆる自分の授業を語る上でのキーワードとなるのである。

これらの作業の後、考察を行う。今回は筆者がプロンプターとなってA子の語りを引き出す役割をした。その折の言葉が随所に見られるメモ書きである。

「ぱっとしない授業」の根拠は教師のスタンスと児童の様子、いわゆる反応状況にそれが表れたということである。教師としては板書の書く速さに難を抱え、どうまとめていくのかわからなかったということであった。また、発問の発した方は好感触であったが、教科書の文章を抜き出すだけの発問に終始したのではという危惧を抱いたようだった。一方、児童の様子では言ってほしかった人が言わなくてあてがはずれたことや書く時間や考える時間が長く、児童役の学生が飽きてしまっているのではという心配を抱えていたようである。それが「ぱっとしない授業」の根拠なのであるが、それでも児童役の学生がにこやかにほほえんでくれたことで、授業をしていてパニックに陥るほどの心理状態にはならなかったという。事実、授業中、終始笑顔でいた。筆者は後ろから見ていて、緊張の中に、よく笑顔でいられるものだと感心していたのだが、これでその原因がわかった。

いずれにしても、A子にとっては机間巡視によって児童の把握をどうしていくのがいいのか。児童の発言や書いていることをどう板書にまとめるか。そして、発問の内容をどうすれば児童がじっくり考えるようなものとするのかが課題となっていることが、A子の語りによって明らかになったのである。

以上のことをまとめたのが、以下に示すA子のツリー図である。四角囲み以外は、プロンプターとの会話をメモ書きしたものである。

## (2) A子の授業反省レポート「国語科の授業についての考察」による自己評価の実際

カード構造化法による授業分析を行い、後日、A子より以下のような授業反省レポートが提出された。以下に示す。(下線は筆者)

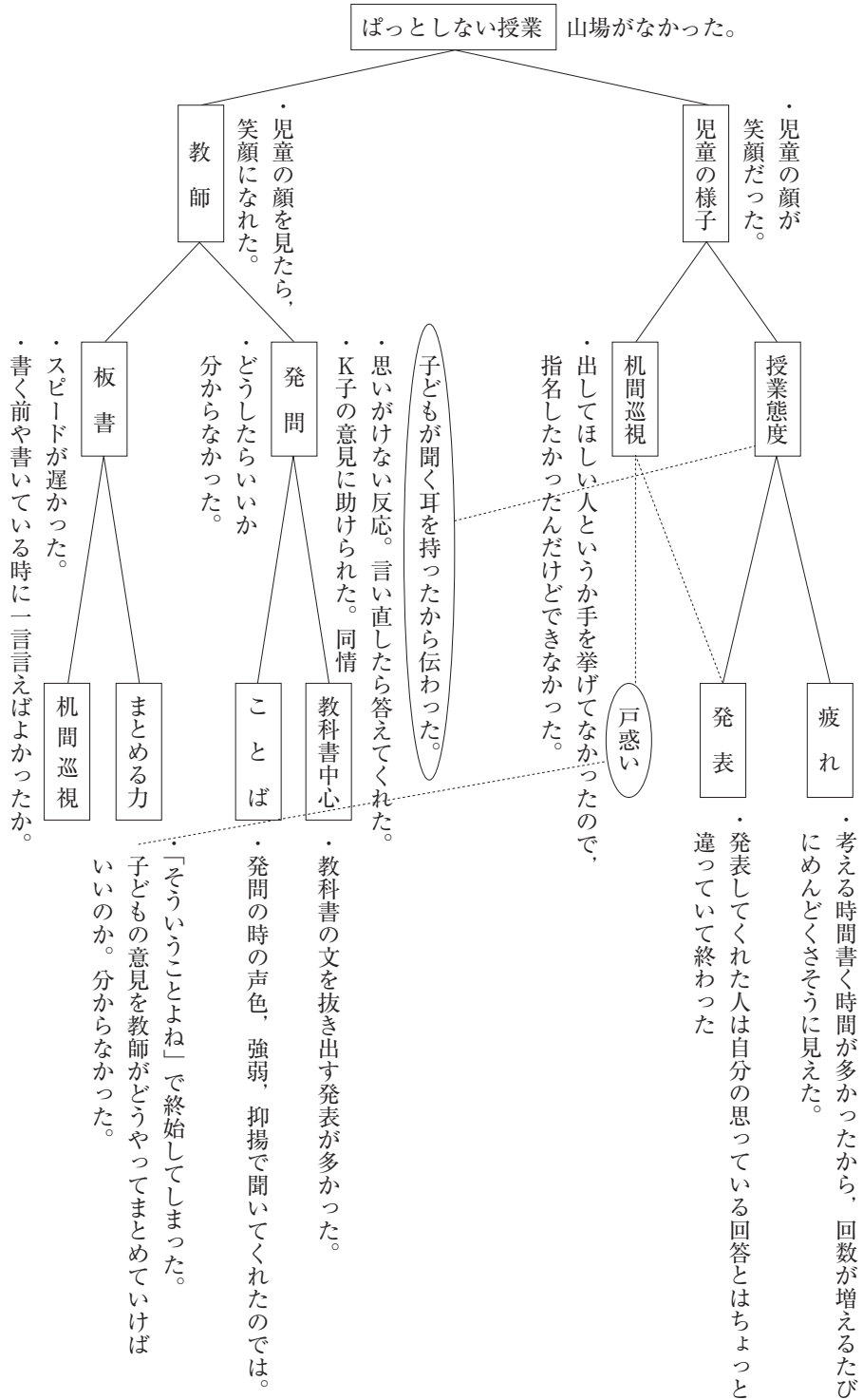
1. 日時 平成25年7月2日(火)

2. 自分たちの授業についての考察

単元名 ー 読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」

いちばんの反省点はごんの行動から気持ちの変化を読み取ることがねらいなのに、肝心な気持ちに移り変わるとき、どうして気持ちが変わったのかをしっかりとおさえていなかったことだ。また、班での話し合い活動を多く取り入れたことで、多くの子どもが発言をできたというメリットもあるが、話し合いをした後の発表も多くあるので文章も多く書くことになり、実際の4年生では疲れる授業となると思った。教科書をもとに、軽い発問・重い発問を取り入れてメリハリのある授業展開をしようと計画していたが、うまく軽重の差が付けられなかった。そのため、メリハリのない淡々とした授業となってしまった。

実際には3名で行った授業なので、総括した反省であるが、下線部に示すように、発表や書くことが多く、長い時間がかかってしまったこと、発問に軽重を付けたかかったとしている。おそ



らく、彼女たちはごんの行動に着目させて、気持ちの変化を考えさせたいという事前の教材研究で話し合わせ、一つ一つ丁寧に押さえたためである。しかし、そのために時間がかかり、発問の重要性に気づいたという点では授業の分析が的確に行われていると言える。

### 3. 改善点

1つ目は、発問に軽重をつけることである。活動にめりはりを持たせるためにしなければならない。話し合い活動においても、発問に対してすべて話し合い活動をするのではなく話し合い活動の意味を考えて、どこで行えばいいのか考える必要がある。

2つ目は、発問の仕方（どこで発問するか、声の使い方など）を工夫することが大切である。

### 4. 自己評価

いちばんの反省は、板書のスピードが遅かったことである。板書をしている間、こどもたちは手持ち無沙汰なので、実際だと騒ぎ始め、授業の集中がとぎれてしまうだろう。板書をしているときに一言（例えば「教科書を目で追って読んでね」など）言うことも大切であると感じた。机間巡視のとき、ある程度見るポイントをおさえて回らなければならない。子どもに意見を発表させて、自分の出してもらいたい意見と違っていたときのような反応をしたらいいかとまどった。表情にも出てしまっていたと思う。今後の課題が多く残った。

「3. 改善点」では、下線部に示す通り、発問の内容と仕方を取り上げている。今後の彼女たちにとっては授業づくりの指針として発問のあり方が中心となっていくだろう。

「4. 自己評価」はA子が担当した部分である。カード構造化法によって考察したことであり、それが文章化されている。下線部にあるように、A子にとっては板書と机間巡視による児童の状況把握の点が評価の対象となったことがわかる。授業を経て、自己評価をすることができている。

### 5. 演習全体の感想

指導案の作成では多くの時間をかけたが、実際に授業をしてみて改善する部分が多くできた。教材研究をすることで、いままで思っていた「ごんぎつね」よりもより深く、様々な視点で読むことができるようになった。もっと、多くの教材を研究してみたい。模擬授業を行って、教師の表情、対応は子どもに大きな影響を与えるのだと感じた。子どもの反応に不安な表情で対応すると、子どもも不安になってしまう。子どものことをよく見て、反応に応じられるようにこれから意識したい。

演習の感想としては、A子にとっては「ごんぎつね」の教材研究によって深まりを感じたことが伺える。また、模擬授業によって教師の表情と、それが児童に与える影響を意識したようである。これらの点が、本演習のねらいを達成していることが明らかになった。

### 6. カード構造化法を行っての感想

カード構造化を行うことで自分の授業を深く見ることができた。自分のちょっとした授業での気づきをカードに書き、それを2つにグループにわけ、どんどん構造化していくことで、問題の共通点・問題同士のかわりなどが見えてきた。自分に何が足りないのか、これからどんなことを伸ばしていく必要があるのかがはっきりとよくわかった。カード構造化を取り入れ授業分析をするのは難しかったが、この方法を用いた方が深く授業を分析することができるので、今後も活用しようと思う。

A子は最後にカード構造化法での分析について感想を寄せている。下線部から、自分の授業を深く見ることができたということであった。これは模擬授業後の反省会ですぐに自己反省を言う



ことになっているが、その時点よりもじっくり自分の授業に向き合うことができたと言い換えた方がいかもしれない。いわゆる改めて時間を経て、再評価することによって、自分の授業にとっての課題が見えてきたのである。そのことが、A子の本レポートに示されていることからわかる。

## 6. 成果と課題

### 6.1 成果

授業反省レポートの記述から、自分の言葉で授業を語らせるための方途としてカード構造化法は有効に機能したといえる。自分の課題が明らかになり、それについてレポートすることによって自分の授業の記述がしやすくなったのではないかと考えられる。

自分の授業が記述できるということは、自分の授業を語れるということである。実際プロンプターとして筆者はA子と授業について聞き役に回ったが、ツリー図を見ながら、A子は訥々としていたが、自分の言葉で授業を語ることができた。その点で、カード構造化法を試みたことは有効であったといえる。今後、授業の自己評価力育成につながる有効なツールとしての可能性を高く感じた。

### 6.2 課題

今回は一部の学生に対しての試みに過ぎないので、今後相当量のデータの採取が必要である。今回は模擬授業を行った中での抽出チームのみであった。しかも本稿ではA子のみをサンプリングしたが、他の2名についても資料をとってあるので、他の2名についても今後分析をしたいと考えている。また、この方法を全員に広げて分析を行っていきたい。また、チームのために自分が担当した部分（今回A子は導入の10分程度）であったので、実際には1時間の授業を担当する中で、試みたい。A子たちは、本年度後期に教育実習を控えているので、この分析方法によって、自分の実習授業の自己分析、自己評価をさせる予定である。

さらに国語科授業としての課題もある。今回「ごんぎつね」の学習として、その発問の在り方が中心であり、班学習形態が中心であった。どんな発問がよかったのか。児童の学習内容として適切であったか。国語科学習の視点をより加えていく必要があると考える。

## 7. おわりに

学生は将来確実に「自分の授業」を構築していかなくてはならない。「自分の授業」を展開する中で、児童生徒ともに自分という教師が共に関わり合いながら成長していく。その成長をより質的に高めていく上で、自分の授業を対象化し、メタ的に授業を見る眼を養うことが求められる。今回のカード構造化法はその一助になるべくツールとして有効に働く可能性を持っていることを示したと思う。ただ授業リフレクションはさまざまな方法があり、その他の方法を試みて、比較する必要がある。またカード構造化法も模擬授業の自己分析において最適なツールであるかは、まだ再試を繰り返す必要があるだろう。

今回の研究によって、教員養成段階で授業力においてできることのひとつは、自分（たち）の授業の自己評価力ではないかという思いを強くした。自分の授業を自分で見る眼が養われること

が、「反省的实践家」と呼ばれる教師の道への第一歩ではないだろうか。授業を見る眼が育てば、自ずと他者の授業を見る眼にもつながる。そして他者の授業を見ることで、自分の授業と比較することによって、さらに自分の授業は磨かれていくのである。今回、授業力育成のための重要な一面を見出すことができたように思う。

[2013. 9. 26 受理]